

[別紙2]

審査の結果の要旨

氏名 伊藤直美

本論文は、退院後のストーマ造設患者における看護支援目標である、ストーマを持つての生活の安定について、これを把握するための尺度を開発するとともに、モデルを作成し、関連要因を明らかにしたものである。本研究では、退院後の消化器系永久ストーマ造設患者 133 名を対象に調査を行い、尺度開発のための計量心理学的検討と、構造方程式モデルの手法を用いた分析等により、以下の知見を得ている。

1. 生活安定感尺度の開発

生活安定感尺度は、「日常生活活動の回復・拡大」7項目、「ストーマの受け止め」8項目、「ストーマケアを受ける場がある安心感」2項目、「皮膚トラブルの心配のなさ」4項目、「排便と体調の把握」3項目の5因子24項目から構成され、一定の信頼性・妥当性を有することが示された。本尺度のうち、臨床的に想定される「皮膚トラブルの心配のなさ」「ストーマの受け止め」「日常生活活動の回復・拡大」の因子間の順序性は、統計的な視点からも支持され、存在する可能性が示唆された。以上より、本尺度は使用可能と考えられた。

2. 生活安定感に関するモデルと関連要因

生活安定感に関するモデルは、臨床的視点とも合致し、モデルとデータの適合度も高く、一定の信頼ができるものであった。生活安定感は、退院後に生じる、あるいは変化する要因として位置付けた、退院後の「ストーマ外来開催頻度」「看護婦からの支援」の強化によって高まり、生活全般の自己評価の向上につながる可能性が示された。このことから、退院後のストーマ造設患者に対し、ストーマ外来の定期的な開催と、看護婦からの支援が提供されるようなケアシステム整備・拡充の必要性が示唆された。

以上、本論文では、これまで看護支援目標内容を把握するために用いられてきた測定用具が、看護支援という立場から介入困難な項目が含まれているなど、生活の安定の把握に、十分、合致したものとなっていない点に着眼し、厳密な手順で一連の計量心理学的検討を加え、看護支援の際に活用できる尺度を開発した。かつ本論文では、これまで経験的に指摘されてきた退院後の外来支援の必要性について、これを実証した研究がほとんどみられない中、生活安定感に関するモデルにより定量的裏付けを与えた。またこのモデルは、看護婦の立場で入手可能な要因によって構成されており、看護支援目標を達成するための情報として活用可能である。

よって、本論文は、退院後のストーマ造設患者への支援を行う際の重要な示唆を与えており、独創性、臨床的有用性ともに高く、この点で、学位の授与に値するものと考えられる。